第4章 能登島ながさき里山保全計画 (案)

地域の概況

長崎地区は能登島の東端にあり、南からの対馬海流域にあるが、冬季にはリマン海流の接近がみられる。

集落の前面には、干拓によって生まれた水田が拡がり、細長い谷地には、谷内田とため 池がみられる。両側にはアカマツ林や植林された丘陵がある。集落中央には、市指定天然 記念物の出村家タブの樹がある。

近年まで良く維持された里山が存在したが、干拓地や谷の奥部の休耕が進み、丘陵部の森林の拡大が進んでいる。全般的に里地里山が利用されなくなり、荒廃してきている。

それでも長崎地区には、石川県レッドリストに掲載される希少植物が80種程度も確認され、希少猛禽類のハヤブサが繁殖する他、ミサゴ、オオタカ、ノスリなども確認されており、高い生物多様性が保全されている地域であるということができる。

能登島の人口は、全体的に減少しており、昭和30年と現在を比べると、東部、中部、西部地区とも人口が半減した。長崎地区でもその傾向は同じで、昭和30年代と世帯数はほとんど変化していないが、人口は約半分に減少し、現在の世帯数は26、90名あまりとなっている。昔は、半農半漁が生活の基盤となっていたが、近年は他産業、他地域への就業の場が多くなり、過疎、高齢化、少子化で集落の維持管理が危惧されている。農用地は水田21ha、畑7ha、すべて兼業農家で専業漁業者3名、他民宿2件、建築業1件、木工漆業1名となっている。

地区の産業には、海草の花まつも(アカモク)がある。その他、定置網漁によって捕れる魚介類は2件の民宿で提供されている。

秋祭りは毎年10月7日におこなわれている。



能登島自然の里ながさきの基本目標と長崎地区の将来像

生物多様性を守り、集落からの生産による価値を生み出し、交流による外部からの応援を加えた集落機能の維持を図ることを基本に据え、「能登島自然の里ながさき」の基本目標と地区の将来像を定める。





基本方針

目標1「長く頑張れ」

まずは現状を維持し、管理を続けていける地域の再生を通じて生物多様性を保全する。

[活動の方針]

畑や田んぼの維持管理の体制を確立する。

環境に配慮した地域管理への住民参加のしくみをつくる。

里道を整備して里山の利用を進める。

ゆっくりと無理なく持続的に休耕地を再生。

失われた環境の復元と多様性のある手作りビオトープ。

自力で維持可能な規模の施設(センター)の建設。

目標2「幸多き」

住民全員が地元で生きていける地場産業の創出。

[活動の方針]

地域資源を活かした特産品の開発。

住民それぞれが得意分野でアイディアを出す。

まずは小遣い程度の収入を得ることを目標に少量生産。

地縁血縁を活かした販売ルートの確保。

生産・販売が継続できるシステムをつくる。

目標3「希望の里|

昔からの良いところを受け継ぎ、交流により集落機能を維持する。

「活動の方針〕

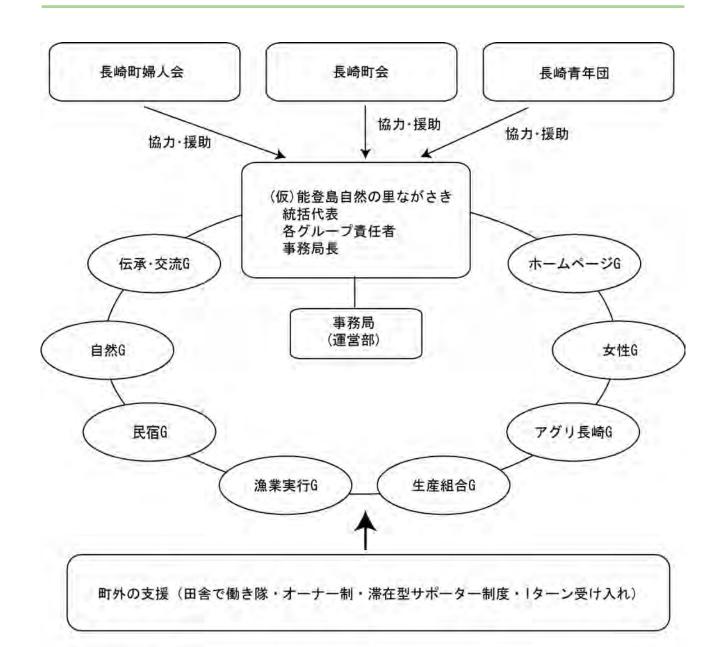
交流による地域のにぎわいの復活。

集落の歴史・文化を受け継ぐ世代間の協力。

廃屋を出さない努力と、新規定住を目指す。

組織

活動団体「能登島自然の里ながさき」を中心として、活動内容ごとにグループを作り、できるだけ集落の全員がそれぞれの得意分野を活かして参加できる組織づくりを進める。既存組織である町会、婦人会、青年団は協力および援助していただける体制とする。全体プランと各グループの調整はグループ長会議のような形で進め、日常の実務的なことは事務局がおこなう。



各グループの役割

自然グループ - 自然環境面の総轄・エコツーリズムのガイド

民宿グループ - エコツーリズム・グリーンツーリズムにより体験型集客

長崎漁業実行組合 - 海の管理・生産および、その他の収入源の確保

長崎生産組合 - 農産物の生産・販売の総合運営

アグリ長崎 - 集落営農

長崎女性グループ - 農産物・料理・加工品の特産品づくりホームページグループ - ホームページの運営、活動の広報

伝承グループ技・匠・手作り(アート) - 販売・体験・学校(仮:わらすべ)の実現

事務局(運営部)の役割

流通と販売の促進(インターネット販売・直売・出身者へのふるさと便・近隣への宅配) グループの連携の促進

連絡窓口・渉外

各種実務・書類作成・活動記録

正式ロゴタイプ

全国で能登島長崎地区にのみ生息するエゾノレンリソウの先祖型である2倍体株(仮称:ノトジマレンリソウ)をモチーフに、「つながり」や「縁結び」の意味がある「連理」草の唐草文様が、能登島を囲むように配置されている。長崎地区の位置は、ハート型の蔓で示されている。



簡易ロゴタイプ

今後、特産品の表示やポスター等に使用できるように、「ながさき」をデザイン化した簡単な ロゴタイプを2種類採用する。集落全員が笑顔で里山再生に取り組むイメージを重ねて表現し ている。またひとつはかつての特産品であるマツタケを組み合わせている。



マスコットキャラクター

かつての特産品であるマツタケを里山再生の象徴として使用した。親しみやすいキャラクター (ゆるキャラ)として、今後の長崎地区の取り組みをアピールする場等で活用する。



ホームページ

地区の取り組みを紹介するとともに、とくに若手を中心とする地区内での交流のツールとして「能登島自然の里ながさき」のホームページを開設する。また事務局からの迅速な広報手段として、事務局ブログも同時に開設する。



実施のための基本計画

1. 生物多様性の保全と里山再生

里山の保全においては、現在残っている良好な自然環境を保全することを前提に、失われた環境の再生にも取り組む。ビオトープ造成や整地等を含むものとするが、現状を保全する管理を主体とした取り組みとする。また、農業等の産業・生活との連携の中で持続的な取り組みとする。

保全と再生は継続が重要であり、無理はせず楽しい要素を取り入れる。管理にかかるイベントをおこない交流の機会とする。

活動の中心は長崎生産組合とアグリ長崎グループとし、徐々に現在荒れた状態になっている 耕作地と森林をかつての美しい里山に戻す。平成22年度までは、石川県の先駆的里山保全支援 モデル事業と連携して、活動のための仕組みづくりと試験的な保全活動を実施する。

希少生物の調査と保全対策、シードバンク調査を実施する。

能登島自然センターを設立し、能登島における生物多様性の保全と研究、交流、環境教育の 拠点となることを目指す。

2. 地域の産業創出

特産品づくりの研修会などを実施し、長崎地区に存在する資源の掘り起こしを平成22年度までにおこなう。

再生産可能な資源に注目するとともに、資源間の連関性(ひとつの資源の掘り起こしが連鎖的に他の資源の開拓につながる)にも着目する。これを「わらしべ資源」として芋づる式に特産品を創出する。

まずは平成22年度中に何らかの収益の実績をつくり、成果がみえる活動とする。

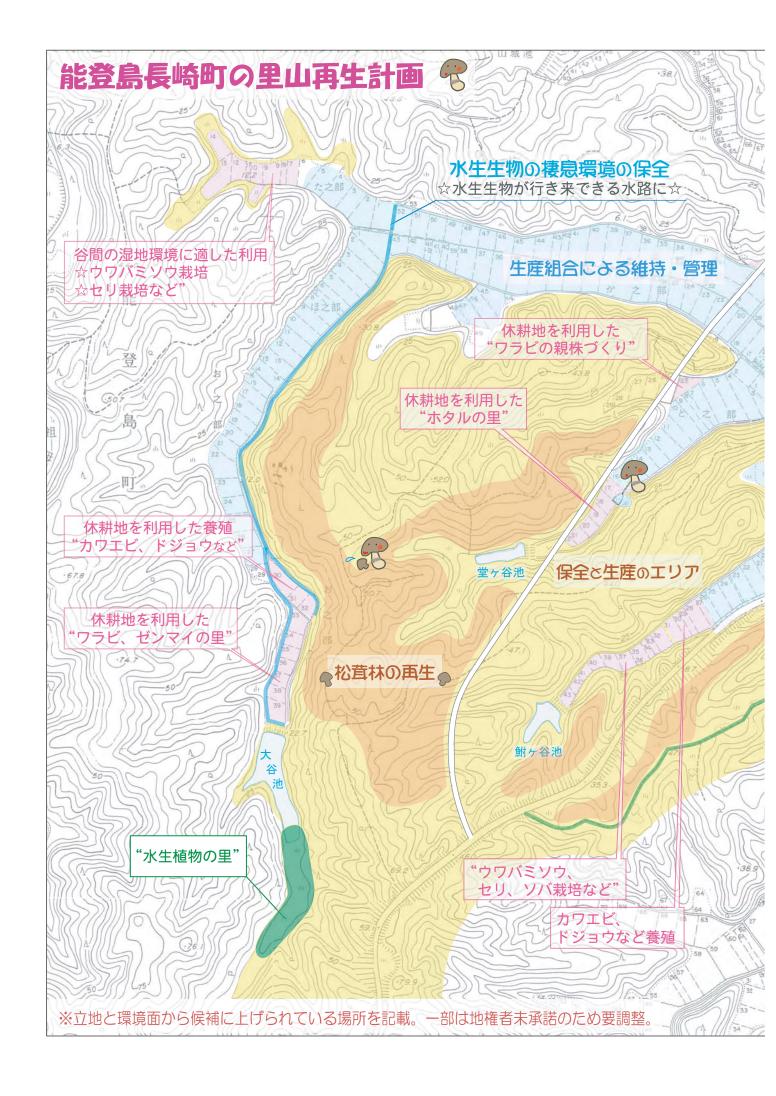
多様な特産品を生み出すために、「一軒一品」運動を展開する。ただし各世帯への義務とはせず、参加の形は緩やかなものとしながらも、競技的要素を入れる。

小遣い程度の収益が出ることを目標に、数年中に地区としての販売システムを確立する。

3. 文化の継承・交流の拡大

民宿を中心とするグリーンツーリズムの展開と、町民が広く参加する交流イベントを実施する。

地区外からの農耕への参加と新規定住を目指した緩やかな耕作地オーナー制を導入する。 地区外者の利用可のエリアの設定や利用条件などの、交流のためのルールづくりを進める。 ホームページを充実させるとともに、ホームページを玄関とする地区住民参加型のブログ村 づくりを進める。必要に応じてIT 研修会を実施する。





海岸植物と海辺生態系の保全・浅海再生プロジェクト(案)

1. プロジェクトの背景と概要

能登島長崎地区には、かつては砂浜がありオニアサリなどの浅海の魚介類の生息環境であったことが考えられる。また、長崎川の河口には干潟があり、その砂泥中には汽水域を好むヤマトシジミやゴカイが生息していたものと思われる。岩礁海岸は現在でも存在するが、2008年2月の寄り回り波により海底シルト岩盤が海岸線まで打ち上げられ、潮の流れが悪くなっているため、岩礁性生物の生息条件の悪化が懸念されている。また、かつては長崎地区の周辺には、海浜性の植物が多くみられたが、海水浴場の整備などによりその多くは失われている。

こうした状況にあって、長崎地区としてこれらの失われた、あるいは悪化した環境の再生を 図り、海浜の生物多様性の向上を目指すとともに、美しい海岸景観を創出する。また、再生された環境を有効に活用して、生物資源の確保と活用を進める。さらに、交流のための場としての機能を目指す。

2. 計画の内容

干潟(浅い水辺)の再生

現在使用されていない干拓地はかつての砂浜があった場所であり、現在でも塩水の浸入が みられる。この表土を浅く剥ぐことによって塩性湿地と干潟、および浅海の再生をめざす。 再生のメルクマールとして、ヤマトシジミやクルマエビなどの繁殖を促す。

岩礁海岸の改善

打ち上げられた岩の一部を重機により除去し潮道を通す。潮が多く入る場所、少し入る場所など変化をつける工夫をして、塩分濃度や水温が段階的に変化することで、生物生息環境の多様性を創出する。

廃棄されるタコ壺を岩礁海岸の一部に設置して、マダコはじめ動物の生息環境を創出する。

小島造成による海浜性植物の育成

岩礁海岸にいくつかの小島を造成して、島内で減少している海浜性植物の生育環境とする。 通常は、環境を造成して自然に種が定着するのを待つことにするが、一部の保全が必要な種 については、種子の散布による育成も検討する。

海底藻場の創出

無礁にシルト石を付着させたり、鉄鋼スラグによって海藻の生育を促す実験をおこなう。 また、山口県立水産高校の水産科学部の生徒らが、使用済みの使い捨てカイロの中身を再利 用した鉄炭団子を使って、藻場の再生に効果を上げている事例があり、この方法についても 実験をおこなう。

能登島自然センター建設プロジェクト(案)

1. プロジェクトの背景と概要

長崎地区には、石川県植物レッドリストに掲載される絶滅が危惧される植物が80種程度生息し、またエゾノレンリソウに近似する植物が全国で唯一生育している。また、ハヤブサをはじめ希少猛禽類が多く生息し、陸産貝類の希少種もみられる。このように長崎地区は県内でもとくに貴重な生物生息空間となっており、生物多様性の保全の観点からの積極的な取り組みが求められる。自然環境と野生生物の保全を進める上で、保全対策と基礎的研究のセンターの機能を持つ能登島自然センターを建設する。このセンターは、長崎地区だけでなく、能登島全体の自然環境の保全を進める拠点として位置づけるとともに、島内外の交流の促進と環境教育のセンターとしての機能も併せ持つものとする。

2. 計画の内容

施設の建設

地権者の了解のもとに、既に建設用地は確保されており、また建設資材も一部確保されているので、これを使って建設可能な規模の建物とする。建物は増築可能な設計として、プロジェクトの進行に応じて徐々に拡大する。小さく産んで大きく育てる戦略により、まずはプロジェクトを実行に移す。

常駐者の配置

センターを機能的にするには常駐者が必要であるが、将来的には、地場産業や特産品生産 の作業場を併設し、そこで業務に従事する者が当面の常駐者を兼ねることとする。

保全活動

長崎地区における野生生物の保全活動の基本は生育地そのものを保全することであるが、 センター内においても植物の種苗育成などをおこない、自生地において予期せぬ問題が生じ た場合などに備えて種の保存をおこなうこととする。

グリーンツーリズムの展開

センター内に展示室を設け、長崎地区の自然を紹介するとともに、民宿と提携してセンター を窓口にしたグリーンツールズムを展開する。

特産品販売との連携

長崎地区で生産された特産品の展示や販売予約受付をおこない、センターの維持管理費の 収入源とする。

塩づくりによる松茸再生プロジェクト(案)

1. プロジェクトの背景と概要

能登島長崎地区やこれに隣接する小浦は、かつては優秀な塩づくりがおこなわれた地域であった。小浦集落は今はなく、ここから移転した人々の子孫は、現在新潟県上越市の塩浜町に住んでいるといわれている。

現在でも長崎地区の海からは、海流に乗って良好な海水が入り込んでおり、ここで採れるアカモクは非常に良質であるといわれている。また浜に寄ってくるアジも他地区と比べて味が良いといわれており、地区の住民は潮のおかげと考えている。

塩づくりは現在はおこなわれていないものの、近年まで小規模の生産がおこなわれていたため、当時の様子を覚えている住民もいる。また、塩づくりに使われた塩釜もまだ地区に残存している。こうした過去におこなわれた塩づくりを記憶や記録をたどって再現し、生産の可能性が確かめられれば、地区の特産として商品化の体制をとる。

塩はさまざまな調理に使用される基本の調味料であり、他の農産物加工品の生産においてこの塩を使うことによって、新たな特産品を生み出す「わらしべ資源」として位置づける。

また、塩づくりの燃料としては、伝統的に松材が使われてきたことから、現在丘陵部の松林が荒れて枯れたアカマツがそのまま放置されていることから、森林整備をかねて、枯れ松材の除去と燃料としての利用を目論む。

かつて長崎区は能登島でもっとも良質のマツタケが産出した地とされている。塩づくりを通じて松林が整備されることにより、マツタケの再生が図られることを期待する「わらしべ長者作戦」を展開する。

2. 計画の内容

塩づくりイベントの実施

平成22年度中に塩づくりイベントをおこなう。最初は地区内の主だったメンバーを対象に小規模な実験をおこない、塩づくりが可能であると判断されたところで、地区外の人にも協力を呼びかけて塩づくりイベントをおこなう。

加工品の生産

できた塩で、味噌造り、漬け物づくりをおこなう。製造については、それぞれの分野の地 区内での名人に委託する。

燃料供給システムとマツタケ再生

かつてマツタケが量産された松林において実験区を設定して、枯れ木を取り除くとともに 下草刈り、落ち葉除去、実生の移植などをおこなう。枯れ木や刈り取った低木は、塩づくり の燃料として利用する。

能登島・人と自然づくりプロジェクト(案)

1. プロジェクトの概要

石川県能登半島にある能登島では、これまで公共事業の投入による地域活性化の試みもおこなわれてきたが、過疎化の進行は止まらず、過去 6000 人いた人口も現在では半減し、高齢化も進み、水田や山林の荒廃も著しい状況となっている。しかし、四方を海に囲まれていることから海産物は豊富で、また谷地田や丘陵に恵まれているため、全国的にも珍しい希少植物が保全され、さまざな山菜などの豊富な自然資源を有している。また、海藻の加工技術や注連飾りの技術など、地域の暮らしの中で培われてきた多くの技も残っている。このプロジェクトでは、能登島の地域活性化の取り組みとして、コンピューターでいうところのソフトにあたる部分、具体的には自然資源を生かした地域の技術を伝えるためのしくみづくりをおこなうと共に、その大本となる自然環境の保全と地域の継続性を計ることを目的としている。取り組みの第一段階として、平成 21 年度石川県先駆的里山保全モデル地区に選定されている長崎地区において、技術の伝承のための学校と工房の開設と、島外の人が受講できるしくみの整備、技術によって生産される特産品の開発と販売のための方策、およびその材料となる地域資源の保全のための取り組みを通じ、次の能登島を担う自立型の人材育成をおこなう。

2. プロジェクトの背景

石川県能登島は、人口約3,500人、世帯数約1,000で20町からなる。旧能登島町は平成16年に七尾市と合併した。従来から半農半漁の島であり、近年人口流出が進みピーク時より人口は半減している。

昭和57年の能登島大橋の開通により、のとじま水族館の開館を始めとしてガラス美術館、ゴルフ場などの観光施設が建設され、年間100万人の観光地となっている。しかしながら、地域の産業の振興は遅れており、近郊の旧七尾市部や金沢市、その他の都市部への若者の流出が著しく、高齢化が進んでいる。そのために田畑の耕作人口が減り、一部の専業者への委託が増えるにつれ、小さな枝部の谷などにおいて水田の放棄が目立っている。また、山林の管理が行き届いてないために、徐々に森林面積が増加し、高木林化が進み、暗く鬱蒼した山林が多くなっている。

そのような中で、今回主な活動の場となる長崎地区は世帯数 26 で、島内 20 町のうち 9 番目の小さな集落であるが、平成 21 年度石川県先駆的里山保全事業モデル地区 7 地区のうちのひとつに選定されており、地域の環境保全と産業振興に向けて町内一丸となって取り組んでいる。多くは兼業農家であるが、専業農家が 5 名、専業漁師が 5 名、その他、大工や木工漆業者、海藻加工業者、また民宿が 2 件など、自立的な自営業者も多く、多くの伝統的な技術を有する地域となっている。これまでの取り組みの中で、こうした技術の伝承の重要性が話し合われており、島外の若者が町内の古老に注連飾りづくりを習いに来るなど、技術交流の取り組みも始まっ

ている。地域内には使われていない作業場等の活用可能な建物もあることから、こうした資源 を活用して自主運営の学校という形での運用を検討している。

3. 課題

長崎地区においては、人と場所の両面からの取り組みの初期的な条件が整いつつあり、今後、 金銭的な面からの条件を整える必要がある。また、技術のマニュアル化、学校の運営方法など、 技術伝承をおこなう上で、最初に取り組まなければならない事項を整理する必要がある。

学校の運営は、当面町民によるボランティアによっておこない、週1回程度の講座を開設することになるが、徐々に専任のスタッフを配置していく必要がある。その際の恒常的な経費について、受講者のみの負担とならないような対策が求められる。その点で、観光と結びつけた取り組みのしくみをつくることが望まれる。

受講者の目的は、当面は遊び仕事としての技術の獲得と、地域住民との交流に重きが置かれるが、将来的には、長崎地区及び能登島を生産活動の場とするべく、定住を含めて、能登島地域の活性化につながる方向性が展望される。その際に、伝承技術をベースにして新たな生産がおこなわれることになるが、生産物の販売など生業としての成立条件を整えていく取り組みも課題となる。

さらに将来には、新たな住民と旧来の住民との融合を進めるための方策も必要となる。

4. 計画の内容

能登島の技学校"わらすべ"(仮称)づくり

地区内の既存の建物を利用して、工房機能をもつ自主運営の学校"わらすべ"(仮称)をつくる。そのままでは学校としての使用には困難があることが予想されるため、必要な補修作業をおこなう。補修作業はスタッフ及び受講予定者によるものとして、その過程で町内にいる大工から技術講習を受ける。こうした学校づくりも授業の一環として取り入れ、実践的かつ達成感のある授業とする。

カリキュラムの作成と実施

すでに、地域において技術を持つ人材の選定はおこなわれているが、特殊な技術に注目したものとなっている。地区内では普段当たり前のように使われている技術であっても、島外の特に若者にとっては、未知の技術であるものも多いと思われる。こうした技術の掘り起こしをおこない、年間のカリキュラムを作成する。さまざまな伝を使って、受講者を求め、当面週1回程度の講座を開講する。受講者を集める術として、既存の観光産業や地域産業との連携を計る。また、能登島を出て近隣の都市部で生活するものも多いが、概して島への愛着は高く、こうした島出身者にも呼びかけて、ふるさとの技術を再学習する機会とし、島外における島の技術伝承の一端を担ってもらうこととする。

技術の記録

伝統的な工芸技術を持つ古老からの聞き取りや、実演の映像を記録に残す取り組みを進め

る。それらを DVD や冊子化して保存、活用する。

自然環境の保全

直接的な材料の確保のためもあるが、たとえば野草の絵柄化など、工芸品などは自然の中からさまざまなアイディアを得ることができる。地域の中で生物多様性が保たれ、それを源泉とする優れた工芸品を生み出すことができれば、地域の新しい産業として活性化が図れるものと考えられる。そのために、地域の自然環境の積極的な保全と活用を図る。ビオトープの整備や自主的な自然保護区の設定などを計画する。

地域における交流人口の向上

受講生が地域をよく理解することは、その技術が生まれてきた背景を知ることにつながり、 将来的には地域との強固な連帯感を培うことにもつながるものと考えられる。地域の祭など のイベントへの積極的な参加を募り、交流人口の増加を目指す。

地域産業・観光との関連

地域の産業や環境事業との連携を計ることは、その産業の担い手だけでなく、島外の受講 生や来訪者の満足度にとっても重要である。学校での受講のオプションとして地域の観光産 業との連携を計る。また、地域の民宿などの積極的な活用を図る。

5. 期待される効果

まず重要なこととしては、長い時間をかけて培われてきた地域の技術が、新しい人たちによって伝承されることが挙げられる。現状の最大の問題は高い技術はかろうじて残っているが、次の担い手がいないということである。また、技術を持っている人たちが高齢化しており、70代、80代がその多くを占めているために、技術の喪失は時間の問題となっていることから、この回避が図られることが最も重要である。

多くの技術が地域の自然資源を必要としていることからは、地域の自然環境の保全が図られる方向へ、さまざまな取り組みが向かう可能性が考えられる。また、たとえば工芸品の意匠の多くが、土着の自然や地形などを模写していることから、技術は地域固有のものであると考えることができ、技術の習得が、地域への結びつきの深まりへとつながることが期待できる。

地域における交流人口の増加は、それ自体が過疎と高齢化に直面する地域においては、活性 化へのもっとも強力なカンフル剤となる。若者が定期的に地域を訪れるだけでも、地域の活気 が甦ることが期待できる。さらに将来的には、地域の存続への礎として交流が生きてくるもの と期待できる。

これまでの伝統の中に新しいアイディアが加わることによって、新しい産業の創出が期待できる。また新しい産業を生み出す場として学校が評価されれば、学校それ自体が重要な地域産業として成長することも期待できる。

里海・里山丸ごとオーナー制による交流人口拡大と地域活性化プロジェクト(案)

1. プロジェクトの概要

能登島長崎地区には、海と山、里地といった多様な環境要素があるが、過疎化の中でそれぞれの要素を管理し保全していくことが困難となっている。そのため地区外からの協力体制をつくることが急務となっている。全国では既に、過疎化高齢化により維持が難しくなっている優れた景観要素を持つ棚田の保全において、棚田オーナー制が進められている。長崎地区にも水田はあり、同様に管理への協力が必要となっているが、これまでに取り組まれている他地域での事例と比べると、水田だけを取り上げた場合には、その魅力に欠ける、しかし、先に述べたように、長崎地区は、遠く立山連峰を見渡す海が目の前に拡がり、磯魚やマダコなどの魚介類も豊富にある。港もあり、現在でも漁がおこなわれている。町民で船を所有している人も多い。山にはかつてマツタケが量産されていた。いまでも季節毎に多様な山菜をとることができる。またかつての薪炭林には現在でも雑木が多くみられる。里には水田の他に良質の野菜が採れる畑がある。長崎地区はこうした優れた環境と一次産業の要素がコンパクトにみられる地区である。

そこで、水田だけでなく、畑、海、山をセットとした「里海・里山丸ごとオーナー制」を展開し、トータルでの魅力をアピールし、協力と交流の輪を拡げ、同時に地区の里山・里海のトータルな保全を進める。

2. 計画の内容

水田・畑・山の3セットのオーナー募集

オーナー制用に地区住民より提供される水田、畑、山を三点セットにして、オーナーを募集する。水田については区画を区切るのではなく、共同の区画として、日常の管理は地区住民や長崎生産組合でおこなうこととする。畑については、基本的にはオーナーごとに土地を割り当てて自由裁量で耕作してもらうが、実際に栽培が難しいオーナーについては、地区女性グループにより栽培をおこない、定期的に野菜を受け取れる仕組みとする。山については、オーナーに割り当てられた場所での下草刈り等への作業参加を条件に山菜の採取の権利を与える。各オーナーには、長崎地内での遊漁の権利を与え、船の貸し出しもおこなう。

作業への参加

地区がおこなう里山管理イベントへのオーナーの参加を促すとともに、オーナーは管理に かかる費用の一部を負担することとする。

簡易宿泊スペースの提供

能登島自然の里ながさきが建設する簡易宿泊施設を希望するオーナーに貸し出す。またオーナーが買い取り可能な小型の宿泊施設を建設する。この簡易宿泊施設の風呂は薪を燃料として、里山管理で生じる粗朶を燃料として使用する。